

Title	<紹介>島津忠夫著『島津忠夫著作集』
Author(s)	米田, 真理子
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 119-123
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69144">https://hdl.handle.net/11094/69144</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 紹介

### 島津忠夫著『島津忠夫著作集』全十五巻

米田 真理子

平成二十一年の春、『島津忠夫著作集 第十五巻 拾遺・索引』（和泉書院）が刊行された。奥付は二〇〇九年三月十六日、第一巻が発行された二〇〇三年二月二十五日から六年の年月が流れたことになる。『島津忠夫著作集』全十五巻の中で最も早い時期の著述は、『第十一巻 芸能史』第七章「統劇評ノート―日記の片端から―」、二、文楽」の「付記」に引用された「文楽鑑賞 老師の芸境―「生写朝顔話」を観て―」である。大阪第一師範学校の同人誌『NEW FACE』一号（昭和二十一年十月）に掲載された、島津先生二十歳の記事。最新は、第十五巻の第二章「北海道に渡った連歌師ト純と中世北方史」であろうか。『語文』九〇号（平成二十年六月）掲載の論文を増補されたもので、その年の一月に大阪大学国語国文学会で発表されたことは記憶にも新しい。このように『島津忠夫著作集』全十五巻には、約六十年間の著作が収められている。その発案から企画・整理・構成そして解説までを、島津先生自らが行われた点に何よりの特色があるといつてよいと思う。各論文を収録されるにあたっては、すべてを再検討・再調査され、また新たに執筆された論考も少なくない。ここ数年の島津先生の記憶といえ、山のように積み上げられた校正を次々とこなされていく一方で、全国を飛び回り、調査をさ

れ、新しい着想を確かめ、形にされていたお姿であった。これらに費やされた六年という歳月は、はたして長かったのか、短かったのか。

島津先生の著作集のご紹介を、とのお話をいただき、一番に、もっと適任の方がおられることを考えたが、校正の手伝いをした人であることとあり、また、毎月先生のお宅で開かれる研究会に参加して、折々にうかがった著作集に関するお話を記すことには意味もあるうと思ひ、お引き受けした。しかし、あらためて著作集を開いてみると、すべての論文には「付記」が付され、各巻の全体的なことは、それぞれの「解説」に詳述されていた。第十五巻には、「著作集総目次」と「月報総目次」とが掲載され、さらに「解説 おおけなくも―『島津忠夫著作集』によせて―」では、先生ご自身が、完成までのいきさつと、全十五巻の概要を記されていた。私がお聞きした執筆にかかわる事柄は、それらの中にすべて書かれていた。曖昧だった事実関係は明確になって、納得させられました。では何を記せばよいのか。困り果てて、先生にお目にかかった際に、ついでを装い、著作集についての何らかを引き出そうと試みたが、浅はかな謀はすぐにお気づきになられるところとなり、結局、いくつかのヒントをくださった。したがって、以下に記すことは、先生のお言葉に導かれて行った作業の結果にすぎず、いわばこれも、形を変えた先生の「解説」といふべきものなのかもしれない。

各巻の内容は、次のとおりである。

第一卷 文学史

第二卷 連歌

第三卷 連歌史

第四卷 心敬と宗祇

第五卷 連歌・俳諧―資料と研究―

第六卷 天満宮連歌史 付、法楽連歌ほか

第七卷 和歌史 上

第八卷 和歌史 下

第九卷 近代短歌史 付、歌枕・俳枕

第十卷 物語

第十一卷 芸能史

第十二卷 現代短歌論

第十三卷 作品―短歌・連歌・随想―

第十四卷 国文学の世界

第十五卷 拾遺・索引

巻によっては、それまでの著書を軸に構成されたものもあり、そして、論文は再録という形をとりつつも、すべてに手直しが施されている。資料紹介も、現在見られるものはすべて原本に当たり直され、それにともなって解題にも追加事項が多い。完全に直したものの、文字遣い程度の訂正に留まるものさまざまであるが、今後は、どの論文も、翻刻も、著作集から引用してもらいたい、とのことである。ただ、著作集に新たに執筆された論文は、インターネットの論文検索にはかからないのではないか、そのため気

づかれにくいのではないかと危惧される。

たしかにおっしゃるとおりで、そこで、それら新稿の論題を本稿に掲げることとして、まずはその前に、「国文学研究資料館のホームページにある「国文学論文目録データベース」で、著作集に収録されたすべての論文の検索を試みた。このデータベースは日本国内で発表された国文学関係の研究論文の目録であり、国文学研究資料館が所蔵する雑誌・紀要・単行本（論文集等）をもとに作成されている。したがって、発表媒体によっては載録されない論文があり、また、著作物に直接執筆された論者は採られないケースがまま見受けられる。本著作集においても、当然のことながら検索にかからない論文があった。ただし、それはシステム上の問題とばかりはいえないことに気がついた。たとえば、巻の構成にあわせて、複数の論考を一つにまとめられた論文があるが、タイトルが変更されたものに関しては検索されなかった。検索される場合であっても、データベースを利用して研究することの意味を考えさせられる例が多かった。これらのことに本著作集の特色が見られると考え、次に、三つの具体例をあげて示してみようと思う。

第六巻第一章「大阪天満宮連歌史」の「二、宗因とその後西山家」は、十二節からなる論文で、「付記」には、一―十一は、『近世文芸』五八号（平成五年七月）に掲載された同題の論文を補訂したものであること、十二は、『会報 大阪俳文学研究会』二八号（平成六年十月）に「宗因とそれ後の西山家 補遺」と題

して掲載されたものであることが明記されており、いずれもデータベースで検索される。しかし、著作集では、「付記」の末尾に、論文の注(11)に示された、含翠堂文庫蔵『宗信君有馬山の記』(土橋宗信筆) 付載『連歌仙三十六人時代不同』が新たに翻刻され、本書についての解説も付されている。これらはデータベースには採られていない。

第七巻第三章『拾遺抄』から『拾遺和歌集』へ―異本拾遺集をめぐって―は、もと『国語国文』の昭和三十六年二月号に同タイトルで発表された論考であり、『和歌文学史の研究 和歌編』(平成九年六月、角川書店)にも、同じ論題で掲載されている。

著作集の「付記」には、『和歌文学史の研究 和歌編』の論文は、最小限の訂正を加えただけで「最初の論考のままに踏襲して収めたものであった」が、その後、片桐洋一氏から受け取られた歓喜光寺本の写真のコピーと、平成十六年六月三十日の多久本の調査とによって、「書き改めた」と記してある。第七巻は平成十七年六月の刊行であるから、最初の論文からは四十数年を経ての改稿となる。著作集の中でも、とりわけ大きく改めた一本とのこと。なお検索にかかるのは、最初の論文のみである。

第八巻第四章『為兼卿和歌抄』と玉葉・風雅の歌風』は三節からなり、一は、冷泉家時雨亭叢書『中世歌学集 書目集』(平成七年、朝日新聞社刊)の解題、二は、『京極為兼の『為兼卿和歌抄』』(『短歌』十七巻七号、昭和四十五年七月)、三は、『玉葉・風雅の歌風』(『ひのくに』昭和三十五年九月)による。論文

データベースでは二のみが検索される。また『和歌文学史の研究 和歌編』には、いずれの論考も収録されていない。

このように見てくると、もはや検索されるか否かが問題でないことは明白であろう。これらの事実は、著作集を順々に読み進める読者にとっては、先生の研究に対する厳密で真摯な姿勢として受け止められることになろうが、後追いをしようとする研究者には、一種の挑戦状に見えるはしないか。改稿の跡は網の目のように著作集全体に張り巡らされていて、後進の我々に常に緊張を強いることを迫るかのごとくに感じられる。先生がご自身で著作集を編まれた意図もここにあると思われ、そして、今回の作業を通して、検索システムに頼ることの危うさを、アンチテーゼとして強く諭されたようにも思われた。

ここに至ってすでに改稿と新稿との境目は定かでなく、つまりは、「島津忠夫」の研究を跡付けようとするときは、まず最初に著作集を手になければならないということである。和歌や連歌の研究だけではない。夏目漱石についても、源氏の成立論もある。分野を問わず、研究者は必ず『島津忠夫著作集』を開いて確認しなければならぬのである。しかしなおかつ、ここに著作集における新稿を掲出するのは、やはりそれらには、探し出すための手がかりが少ないと考えるからである。以下、他の媒体に収録されていない点を基準に抽出したが、判断は難しかった。一部のみが既出のものも、省略した。

第四卷 第二章「十四、宗祇終焉の旅と『宗祇終焉記』」、同「十六、宗祇画像の変遷」

第五卷 第二章「一、下葉」、同「二、ト純句集」(翻刻部分)、第三章「四、宗祇一座百韻(2) 明応八年三月七日『賦何人百韻』」

第九卷 第一章「十一、現代短歌の黎明期―「日光」から『新風十人』まで―」、同「十四、斎藤史と坪野哲久」、同「十六、現代短歌と塚本邦雄―なかば回想的に―」、第三章「二、歌枕より俳枕へ―たとえば肥前の場合―」

第十卷 第二章「一、葵・賢木から須磨へ―伏線と芽―」、同「三、濡標から絵合へ―蓬生・関屋の位置づけ―」

第十一卷 第二章「十三、能・狂言資料(3) 多久市郷土資料館蔵謡本」、第四章「『けいせい会稽山』を読む」、第六章「雑編」のうち「一つのメモから」、第七章「続劇評ノート―日記の片端から―」のすべて

第十二卷 第四章「八、永井陽子論(3) 伊藤邦子氏宛返信案・(5) 車座・(6) 永井陽子没後のこと」、第五章「現代短歌のレトリック」のうち「二、本歌取りの歴史―古典和歌にみる本歌取りのルールとその姿―」、同「四、人名をよみ込む歌」

第十三卷 第一章「一、歌集 心鋭かりき 付(2) 批評集、前田裕志氏」、同「二、心鋭かりき以後」、同「マグマ」と私」、第二章「一、連歌百句」・「二、続連歌百句」・「三、賦花何連歌」・「五、連歌張行―国立能楽堂企画公演―(2) 連歌張行の記」、第

三章「一、エッセイと随筆」・「八、ゆめうつつ」・「九、上棟式と竣工式―冷泉家―」・「十、年号と西暦」・「十一、『道』から」のすべて・「十二、『歌姫』小論―清原和義氏を偲んで―」のうち「(10) 若山牧水の郷里を訪ねて」・「(11) 草津と伊香保」・「(12) 尾上神社の尾上の松と高砂神社の相生の松」・「十三、思い出す人々」のうち「(1) 家森長治郎」・「(2) 西山隆二」・「(3) 頼原退蔵」・「(4) 山崎喜好」・「(5) 岡見正雄」・「(9) 今井源衛」・「(10) 小高敏郎」・「(12) 石川常彦」・「(14) 清原和義」・「(15) 寺島樵」

第十四卷 第一章「一、幻の国文学概論」、同「三、『新編国歌大観』の成立するまで」、第三章「付 宗因・宗春父子短冊一軸のからくり」、第四章「随想で綴る私の履歴」のうち「口絵」と「付、体験を通しての教育制度雑感」、第五章「男ひとりの食日誌―平成十三年―」、第六章「著述目録」

第十五卷 第一章「『古今和歌集』と近代」、第四章「雑考」の口絵、「三、詞書と現代短歌」、同「四、有名にして不幸な歌人たち―大伴家持・紀貫之・藤原定家―」、同「五、梅と和歌・連歌・俳諧―逸翁美術館の展示を通して―」

研究論文以外の特色も述べておきたい。

第十五巻に掲載された総索引は、コンピューターによる機械的な一斉処理ではなく、きわめて基礎的な手作業によって作成されたものである。そのうち人名索引は、明治以降を区切りとされた

ものの、活躍時期の具合で不統一が生じ、一点ずつ点検されたとのこと。万葉人から現代人までが同じ紙面に名を連ねる。刊行後すぐに、校正を担当したお一人から「読める索引」との感想が寄せられたとか。ちなみに私の名前も採っていただいたが、すぐに頼朝がいた。

巻毎に特色ある人に依頼されたという月報も見逃せない。装幀も繊細で美しい。ケースの絵はご令嬢の藤森佐貴子さんが描かれ、題字は山口ひとみさんによる。第十四巻第四章「随想で綴る私の履歴」の「口絵」には、最初に昭和二年四月撮影の写真が掲載されている。生後七ヶ月の島津先生である。第十一巻第七章「統劇評ノート―日記の片端から―」(の特に「三、宝塚歌劇」)や、第十四巻第五章「男ひとりの食日誌―平成十三年―」を楽しみに待っていた読者が多くいたことも書き添えておこう。

第十三巻に収められた短歌については、私の個人的な思い出を記させていただきたい。先生が大病をされた時、故あって歌誌『マグマ』を拝見する機会があった。たしか間もなく退院される頃のことであつたと思う。

いくつか並んだ先生の歌の中に、

三千円小川に落とし流れ行く拾はむとして覚めぬもう朝  
が目止まった(第十三巻第一章「一、心鋭かりき」より)。詠作時期は知られないが、目にした時、それまで深刻だった空気が、ふと和わらいだことをよく覚えてる。お元氣になられた今でも、時折思い出しては、一人で楽しい気分になるのである。

第三十一回現代短歌大賞の受賞についても触れておかねばならない。受賞は『島津忠夫著作集』全十五巻、並びに過去の全業績」が対象とされ、選考委員の篠弘氏によると、なかでも著作集の第九巻と第十二巻とが高く評価されたということであった。

先生は、相変わらずお忙しい。講演に、調査にと、全国を駆け回られ、毎月、杭全神社で連歌をまかれ、冷泉家の研究会に参加され、お宅で行なわれる研究会では今は心敬の歌集を読んでいる。研究意欲はますます旺盛である。著作集の第十五巻は刊行されたが、これは最初の完成と呼ぶべきではないかと密かに思っている。続刊が俟たれるところである。

#### 注

(1) 本書の刊記は西暦で記されているためそのままとして、他は年号で記す。第十三巻第三章「十、年号と西暦」に做った。

(2) 凡例では、全般にわたり、矢野貫一、長友千代治、加賀元子の各氏をご尽力されたことが記されている。

(和泉書院、二〇〇三年二月～二〇〇九年三月、

「全十五巻」一八六、九〇〇円)

(よねだ・まりこ 本学特任研究員)